

佐土原キリスト教会 2021年3月28日礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書 21章 1～11節

説教題：心に王を迎えよう

最近、ある方からラインでヴィクトール・フランクルのインタビュー番組を送って頂きました。フランクルはユダヤ人の精神科医で、第二次大戦中、ナチスのアウシュビッツ強制収容所を生き延びた人です。その経験は「夜と霧」という本になって読み継がれています。さてヨーロッパ各国がナチスによって占領された時、その国々ではナチスによってユダヤ人が捉えられ、収容所に送られました。そんな中、デンマークの王様は、ユダヤ人を守った王様だったそうです。王は、ユダヤ人が付けさせられた黄色い星のワッペンを自分もつけたほどに、ユダヤ人に同情し、必死になってユダヤ人を守り、また国民の先頭に立ってナチスに抵抗したそうです。そのデンマークは今、国民の生活満足度が世界で1位か2位だと聞きました。こんな王様なら、国民もついて行こうと思ったのではないのでしょうか。

今日から「受難週」に入ります。この金曜日にイエスは十字架に架かれますが、それに先立つ日曜日、イエスは十字架の待つエルサレムに入城されました。今日は「マタイ福音書」の「エルサレム入城」の記事から学びます。この箇所のメッセージを一言でいうと「イエス様をあなたの心に王としてお迎えしなさい」ということです。聖書に聴きたいと思います。

ガリラヤからエルサレムに向かって旅をして来られたイエス様一行は、オリーブ山の手前のベテパゲに近づきました。オリーブ山を越えればエルサレムです。その時、2人の弟子を「近くの村に行ってロバとロバの子を連れて来るように」と遣いに出されます。その際、「もしだれかが、あなたがたに何か言ったなら—(『なぜそんなことをするのか』と言う人がいたら)—主がお入用なのです、と言いなさい」(3)と言われました。弟子達が行ってみると、お言葉通りにロバとロバの子がいて—(並行箇所「マルコ 11章」を見ると)—彼らがロバを連れて行こうとして、持ち主に咎められた時にも、「主がお入用なのです」と言うと、彼らは連れて行くことを許してくれるのです。「主がお入用なのです」とはどういう意味なのでしょう。

「主がお入用なのです」、それは、ロバの持ち主に対して「あなたの主があなたのロバを必要としている」、あるいは「ロバの本当の主がロバを必要としている」ということではないのでしょうか。つまりイエス様は、ロバの持ち主に対して「私が主だ(王だ)」と主張しておられる、「主(王)」になろうとしておられるのです。そして、それを弟子達そのまま伝えたところ、持ち主はすんなり許してくれました。それはつまり、イエス様が「主(王)」になろうとしておられる、そのことをロバの持ち主が受け入れた、イエス様を「主(王)」として迎えたということです。同じことが次の部分からも言えます。イエス様はエルサレムに入城されるのにロバの子を用いられました。ここまで歩いて来られたのです。あと 3km です。なぜロバに乗る必要があったのでしょうか。そこにイエス様のメッセージがあるのです。「旧約」の「イザヤ書 62章」に「シオンの娘に言え。『見よ。あなたの救いが来る…』」(イザヤ 62:11)とあり、「ゼカリヤ書 9章」に「エルサレムの娘よ。大いに喜べ。見よ。あなたの王があなたのところに來られる。この方は…救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる…雌ろばの子のころばに」(ゼカリヤ 9:9)とあります。「マタイ 21

章5節」は、「イザヤ62章」と「ゼカリヤ9章」を組み合わせたものです。「旧約」の預言者は「やがてやって来る『救い主(王)』は、ロバの子に乗ってエルサレムにやって来る(入城する)」と預言していたのです。そしてイエスはその通りのことをされたということは、「私こそ預言された救い主である(王である)」と宣言しておられるということです。イエスはロバの子に乗られました。すると—(弟子達は自分達の上着をロバの上に掛けましたが)—人々は、イエスの進まれる前に上着を脱いで道に敷き、木の枝{「しゅろの木の枝」(ヨハネ12:13)}を切って来て道に敷きました—(そこからこの日曜日を「棕櫚の日曜日」と言います)—イスラエルでは、それは王を迎える時にすることでした。また人々は「ダビデの子に、ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に…」(9)と叫びました。「ホサナ」というのは「主よ(王よ)、救って下さい」、という言葉です。人々は、預言されていた王(救い主)が登場して、ローマを追い出し、ユダヤ人の国を再興してくれること待ち望んでいました。だから、奇跡を行うと噂され、しかも預言通りにロバに乗って入城したイエスを、熱狂的に迎えたのかも知れません。しかしいづれにしても、ここまで目立たないように活動して来られたイエス様が、ここで初めて預言されていた「王」になろうとしておられるのです。そして人々は、イエス様を「王」として迎えたのです。この人々の中には、やがて「イエスを十字架につけろ」と叫び出す者もいたでしょう。しかしイエス様は、その人々が歓迎することさえも、「それで良いのだ」として受けられたのです。この箇所は、そのことを伝え、ここを読む私達に「王になろうとされたイエスの、そのメッセージを受け取るように」、「あなたもイエス様を『王』としてお迎えするように」と語るのです。

しかし、なぜイエス様を「王」としてお迎えしなければならないのでしょうか。ただ「信じる」というだけではいけないのでしょうか。いやその前に、『王』として迎える」とはどのようなことでしょうか。「王」というのは現実的な意味での支配者です。実生活から離れた、頭だけの神ということではない、生きる現実の中で見上げるべき存在だということです。私達は「王」を戴くということには抵抗があります。自由が束縛される感じがします。しかし実は、実生活で真に見上げるべき方を持っていてこそ、様々な束縛、圧迫から解放されて、生きて行けるのではないのでしょうか。

一昨年11月に来て下さった佐藤彰先生は、原発事故で教会員と大変な流浪の旅をしておられるに最中、こう言われました。「今の状況は正直に言えば苦しみです。でも聖書に『試練を喜べ』と書いてある。だから、確かに本音の部分では苦しいけれど、でも信仰を働かせて喜ぶ方を選びとって行きましょう。主が喜べる状況を与えて下さいます」(佐藤彰)。イエス様を「王」として迎えるとは、色々なことが起こるこの現実の中で、「王」なるイエスに信頼し、自分の本音を裏切るようにしてでも「王」なるイエスへの信頼に生きようとするのではないのでしょうか。そこに私達を、困難の中、辛い中でも、その束縛の中で立たせ、前に歩ませる力があるのではないのでしょうか。

最近、テキサス州にお住いのP姉妹からメールを頂きました。テキサスは、多数の死者まで出るような大寒波に見舞われ、P姉妹ご家族も大変な経験をされたようです。雪嵐で車のタイヤの空気が抜けて、危ない運転を強いられたり、家が停電して、家の中がだんだん寒くなって、暗い

部屋で何枚も重ね着をして過ごしたり、水道の水が凍って水が止まったままになってしまったり、ついには友人の家に避難しなければならなくなったそうです。しばらくして家に帰ることが出来たそうですが、今度は、店に買い物に行ったら物凄い行列で—(私もインターネットで行列の写真を見ましたが、気が遠くなるような行列でした)—ようやく店の中に入っても、品物がない、品物の供給が追いつかなかったり、皆がパニックに陥って買い占めに走ったりしたことが理由のようですが…。とにかく大変な経験をされたようです。ところが、そのメールには、次のような言葉がありました。「私達の神は良い神です。いつも微笑んで下さっています」、「私達に知恵を与えて下さった主に感謝します」、「主は良い主です」。「主は、昔、今、そして未来、変わることはないのです。何という希望でしょう」。寒波の大変な経験が書かれているメールの中に散りばめられている主への信頼の言葉、置かれた状況の中でイエス様を信頼して行こうとされる姿に、それが彼らを支えているように、教えられる思いでした。

なぜイエス様を「王」としてお迎えするように勧められているのか。それは、そのようにイエス様に向かった時に、現実の生活の中で信仰が力を発揮するのではないのでしょうか。そうでなければ「イエスを信じている」と言いながら、信仰が生きる現実に具体的に関わって来ないということになってしまうのではないのでしょうか。

そして、イエス様は、私達が「王」として戴くに相応しい方なのです。私は「イエスは、聖書の預言に従うことによって、ご自分を『王』として宣言しておられる」と言いました。しかし、もう1つ大切なことは、イエス様は、聖書の預言(神の言葉)に従うことによって—(神の言葉を自分が現実にするによって)—「神の言葉はこのように現実になるのだ」ということを示そうとされたとも思います。先の「イザヤ 62 章」の1節にこうあります。「シオンのために、わたしは黙っていない。エルサレムのために、黙りこまない…その救いが、たいまつのように燃えるまでは」(イザヤ 62:1)。言い換えると、神は「私はエルサレムを救うために休まないで働く」と言われたのです。私達の立場に置き換えると「私は神の民(あなた)を救うために休まないで働く」と言われたということです。この箇所でもイエスは神の民を救うためにエルサレムに入城され、神の民のために働かれたのです。イエス様は、人々の心が砕かれ、本当の信仰に導かれるように命がけで語られたのです。そして5日後には十字架に架かられるのです。重い十字架を背負って、ローマ兵に鞭打たれながら、何度も何度も倒れながら、ヨロヨロと歩いて下さったのです。罪の故に滅びに向かって一直線に歩いていた人々の(私達の)罪を、ご自分が拾い上げ、代わりに背負って十字架に架かって下さったのです。私達の代わりに滅びを引き受け、私達に永遠のいのちに至る道を造って下さったのです。そのようにして—{「エゼキエル書」に「わたしは、だれが死ぬのも喜ばない…だから、悔い改めて、生きよ」(エゼキエル 18:32)とありますが}—神が私達を愛しておられる、神は私達が滅びることではなく、生きることを願われる、その神の愛の意志は必ず実現するということを、言い換えると、神の愛の御心をイエスが実現して下さるということを示して下さったのです。イエス様は、そのご生涯と十字架によって「私はあなたを救うために休まないで働く」という神の意志を実現されたのです。イエス様はそのような「王」なのです。

イエス様はご自分を「王」だと主張されました。「王」とは、その意志によって世界を治める

存在です。イエス様は実にそういう力を持つ方です。しかしイエス様は、単なる支配者、権力者ではない、「私は王であるけど、その王とは『神の愛を実現する王』である」と示されたのです。その方は十字架で死なれたけれども、復活して、今も生きて、世を支配しておられるのです。その方が、今朝、私達にも「私があなたの王である」と言われるのです。この箇所は「そのイエスをあなたの王として迎えなさい」と語ります。私達はそのメッセージに応え、この方を「王」として迎え、この方を「私の王」として生きる時、私達は「私の人生は、決して『もうどうにもならない、お終いだ』というころまで悪くなることはない」という希望を持つことが出来るのではないのでしょうか。なぜなら、私達にどんなに辛いことがあっても、どんなに苦しいことがあっても、「お先真つ暗だ」と思えるようなことがあったとしても、この世を支配し、私の人生を支配しているのは、私でもない、誰か他の人の力でもない、運命でもない、私を愛する神の意志であり、私を愛するが故に十字架を負って下さった「王」であり、その「王」が死から甦り、今生きておられ、私に神の愛の御心を実現して下さい、という希望を持つことが出来るからです。そうであるなら、たとえ何があっても絶望しなくて良いのではないのでしょうか。いや、絶望することがあっても、なお、そこで希望を持つことが出来るのではないのでしょうか。そして、たとえ死に臨むことがあっても、イエス様の「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」(ヨハネ 11:25)という約束を握りしめることで、暗闇に放り込まれるのではない、なおそこで「イエス様が、神の愛の御心を私達に実現して下さい」という望みを持つことが出来るのではないのでしょうか。

イエス様を「私の王」として心にお迎えして、生きて行きましょう。その時、私達が生きるにしても、死ぬにしても、その信仰は、私達を支え、希望を与え、私達を支えて行くのです。